

# 教育者宮澤賢治の研究（Ⅰ）

## ——農学校教師時代を中心に——

森 下 恭 光

### 緒 言

宮澤賢治は、明治二十九年八月二十七日に誕生し、昭和八年九月二十一日に没した。

その生涯は、37年と短い。しかし、彼の業績は多彩で、とくに、その文学的活動は短期集中的になされたものであるが、詩、童話、戯曲とジャンルも広く、質、量ともに特筆すべきものがある。

本論では、彼の業績の中で、文学作品ほどには知られていない教師活動について、その内容と特色を、彼の資質との関連において明らかにしようとするものである。

彼の教師生活は、稗貫郡立稗貫農学校、県立花巻農学校において、4年4ヶ月間持続した。彼が25歳から30歳の間のことである。

この間、彼は、農学校教師として、休日も度外視し、1日の全時間をその教育活動に費やすかの印象を与える程、教育に熱中した。

彼の勤務校は農学校という実業学校であり、規模も小規模で教員スタッフも少数であった。

その為、担当科目も多く、実習指導を除いても7科目を担当した。そのことから来る教材研究に伴う過大な負担が覚悟されなければならなかったが、それを彼は苦にしなかった。

のみならず、時間を効率的に使う工夫によって生じた余暇時間において、創作や音楽鑑賞を楽しむ余裕を見せている。

それらの實際を、本論によって明らかにし、彼の持っていた精神的エネルギーの発露としての教育活動の特色を指摘することを意図するものである。

本年は、宮澤賢治の、生誕100年を記念する年であることも念頭に置き、とくに、関心を持たれるべき、彼の教育的業績をとりあげることとした。

### 一

賢治の教師生活は、大正十年十二月三日、岩手県稗貫郡立稗貫農学校教諭に就任した時に始まり、大正十五年三月三十一日付で依願退職したことで終止する。その間、約4年4ヶ月が、彼の教師生活のすべてである。

彼の勤務校は、明治四十年七月に落成、開所した蚕業講習所に端を発し、大正八年四月、稗貫郡立農蚕講習所と改称され、さらに、大正十年三月九日付の文部省告示第九十九号による農業学校規定で稗貫農学校となったものである。

岩手県稗貫郡立稗貫農学校則によれば、教育目的は、「農事ニ関スル須要ナル教育ヲ施スヲ以テ目的トス」<sup>(1)</sup>と定められている。修業年限は2ヶ年であり、定員は80名と定められていることから察しられるように、小規模な実業学校である。

敷地面積も1068坪と少なく、校舎面積は、98坪余りで、個人住宅と比較しても大差のない狭小なものであった。

ところで、入学資格は、年令満14歳以上で、修業年限2ヶ年以上の高等小学校を卒業した者、又は、これと同等の学力を持っていることが入学試験によって認定された者となっている。授業料は徴収されず、生徒の負担すべき経費としては、教科書、11.80円(年額)、学用品、12.00円(年額)、修学旅行費、3.00円(年額)がその主なものである。なお、寄宿する者は、8.50円(月額)の寄宿舎費を徴収された。

賢治が就任した当時の稗貫農学校の教員は、校長を含めて5名であった。

次に、教員名と、その担当科目をあげる。校長は、畠山栄一郎<sup>(2)</sup>で、修身、法制経済、畜産、蚕体病理林学を担当。堀篁文之進は、教諭兼舎監で、英語、作物、園芸、林学、虫害・作病畜産を担当した。

白藤林之助(慈秀)は、教諭兼舎監で、国語、算術、幾何、物理、博物、体操を担当。

宮澤賢治は、教諭で、代数、化学、英語、作物、農産製造、土壌、肥料、気象の他に、農業実習として水田稲作を担当した。

奥寺五郎は、書記兼助教諭心得で、養蚕、博物、気象を担当した。

規模といい、教員スタッフといい、いずれも十分というには程遠いもので、これによって教育目的とされる「農事ニ関スル須要ナル教育ヲ施ス」ことが、どの程度達成されると期待されたか、疑念を抱かざるを得ないものである。しかし、それは、学校教育の制度が整った現代において見るからいえることであって、当時の常識と実業教育に寄せられる期待からすれば、異例のものではなかった。

稗貫農学校の北側には、明治四十四年五月開校の岩手県立花巻高等女学校が、規模に於いても対照的な外観を見せて設置されていたのである。

県立花巻高等女学校の寄宿生は、隣接する稗貫農学校の生徒を塀から首をのぞかせて「クワッコ大学」<sup>(3)</sup>とからかった。

農学校の周囲には桑園が約1380坪あり、下台は麦畑約600坪になっていた。その他の農場は、学校より歩いて約20分の距離に位置していた。水田約300坪と600坪の野菜畑がそれぞれある。

さて、このような規模と内容を持つ稗貫農学校の期教諭として彼が就任したのは、大正十年十二月三日(土)のことであった。八級俸、80円の給与で、新任式は養蚕室で行なわれた。年令25歳、身長5尺4寸、体重16貫の賢治は、2年生18名、1年生44名を前にして、丸坊主の洋服姿で着任の挨拶をした。その内容は、「ただ今ご紹介をいただいた宮澤です」<sup>(4)</sup>というだけの簡単なもので、聴く者に意外な感じを与えた。

照井謹二郎(大正十二年卒)は、「あまりのあいさつの短さに驚き、次の言葉を何と発するか、先生の口もとを見つめて期待していた生徒たちは一瞬とまどいをさえ感じた」<sup>(5)</sup>と回想している。

賢治の教師生活は、このようにして開始されることになったが、生徒を前にした着任の挨拶にも表われているように、教師としての賢治には、その最初の時点ですでに、他の教師とは様子の異なるところがあった。

彼は、その経歴から見ると、とくに学歴から見ると、農学校の教師になることに何の不足もないどころか、盛岡高等農林学校(現在の岩手大学農学部)で農芸化学を専攻し、「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」<sup>(6)</sup>と題する得業論文を提出し、同校を優秀な成績で

卒業したことを考慮すれば、高等教育機関の教師になる資質さえ具えていたといえるかも知れない。ところが、彼自身は、盛岡中学校を大正三年三月に卒業後、盛岡高等農林学校に進学する大正四年四月までの約1年間に、結婚や進学の問題で父と対立し、その頃読んだ島地大等<sup>(7)</sup>の編『漢和对照妙法蓮華經』から異常なまでの感動を受けたのを契機として、急激に法華經へと傾斜して行ったという経歴を持つ。

一方で、幼少時代からの童話、短歌（とくに石川啄木、明治19年－明治45年、の影響が強い）、ロシア文学<sup>(8)</sup>との接触で強化されていった文学愛好の性向があり、高等農林学校を卒業する時点では、彼の胸中に教職への執着や志向は、全くうかがわれない。

大正七年二月には、父に宛てて法華行者として生きる決意を示しているし、八月頃には、自ら創作した童話「蜘蛛となめくちと狸」<sup>(9)</sup>、「双子の星」<sup>(10)</sup>を家族に読み聞かせていることから童話の創作活動も開始されていることがうかがわれる。

この年の十二月、日本女子大学在学中の妹トシが入院したため、看病のため、母と上京。

大正八年、看病の傍ら、自身の職業についても思案、父に宝石業を東京で開業する希望を伝えるが拒否され、三月、全快したトシと帰郷する。この時より大正十年までは、家業である質屋と古着商を手伝う。五月、「猫」<sup>(11)</sup>、「ラジュウムの雁」<sup>(12)</sup>を書く。

この年、賢治は、稗貫農学校の前身である郡立農蚕講習書の講師を請われて勤め、鉱物、土壌、化学、肥料を講義している。この時の様子を当時の生徒であった伊藤巳代松（大正八年入所）は、「久留米餅にきちんと袴を着けて、にこやかに岩手県地質、土壌構成などについて語られたが、時々、謄写版刷りのパンフレットのようなものを配って読んで聞かせました」<sup>(13)</sup>と回想している。佐藤成によれば、この時読んで聞かせたのは、「手紙一」<sup>(14)</sup>、「龍のはなし」<sup>(15)</sup>であるらしい。

翌年五月、盛岡高等農林学校の研究生を修了したのを機に、関豊太郎教授<sup>(16)</sup>より、母校に残れるべく推薦する意向のあることを伝えられるが辞退する。秋、田中智学の国柱会に入会し、町内を歩き寒修行をするなど信仰生活への傾斜が強くなる。

大正十年一月、彼は、突然に上京する。国柱会の高知尾智耀を訪ね、そのまま本郷菊坂町に下宿し、筆耕や校正に従事。この頃、「法華文学」の創作を志す意向も固めている。

ところが、在京生活も妹トシの病気で突然終わり、八月中旬には帰郷している。

「愛国婦人」九月号に応募童謡「あまの川」<sup>(17)</sup>が掲載される。

このような時期に、稗貫農学校では、岩崎三男治教諭が兵役につくため急に退職したので、その後任を探しているということで、賢治がその候補者にあがることになった。

賢治を推薦する者の中には、稗貫郡長葛博と視学官羽田が居り、地方の有力者である賢治の父政次郎の力が大きな意味を持っていたことがわかる。加えて、校長の畠山栄一郎は賢治の恩師関豊太郎が自分の母校の教授であることにより、よく知る人物であった関係で、賢治を信頼した。

当初、躊躇していた賢治も「かねて私がいちばん尊敬している関先生と真正面から喧嘩されるくらいの校長先生のおられる学校で働けるのでしたら」<sup>(18)</sup>ということで、稗貫農学校教諭に就任する話を承諾したということである。

もっとも、畠山栄一郎校長は、最終的には賢治を信頼し、就任を懇情したものの、途中の過程において、賢治の信仰生活から来る奇行をあげ、不適格を唱える者のあることを知り事情を調べるという経緯があった。

## 二

生徒の前で、簡単な着任の挨拶をした賢治の教師生活の開始期を知る浅沼政規（大正十一年卒）は、当時を回想して次のようにいう。

「肩幅も広くがっしりしていた先生は、いつもニコニコしてやや前かがみになって授業に臨まれた。高くはないが実によく通る声で講義を続けた。生徒を背に黒板に説明しながらどんどん書いていく。それが実に速い。横に書く、斜めに書く、図を画く、英字でも書く、すきのあるところのどこにでも書く。わずかの時間に黒板全体が余すところなく書かれてしまう。」<sup>(19)</sup>というのである。この授業を聞く生徒は2年生で、しかも卒業も近い時期であるから、学校生活に慣れた時期であるため、テンポが速く、かなり変則的な賢治の授業に対して、当惑いという程のものを感じていない。

しかし、1年生は、別の印象を受けていたことが、回想によって確認できる。当時1年生であった福田（及川）留吉（大正十二年卒）は、次のようにいう。

「最初の頃は、早口で、私も生徒にはなかなかその講義に追いつけないのです。『ちっともわからん。ちっともわからん』と連発して口うるさい隣席の大内金助君や、前席の小田島治衛君、そのほかの連中もわいわい騒ぐ」<sup>(20)</sup>という状況であったというのである。

回想する当人も講義についていけなかったという、その最大の理由は、やはり話し方と書き方（板書）のテンポが、理解を越えるものであったことにあったと推測される。

しかし、校舎は狭く、教室が2つで、それに隣接して職員室があるという構造から、賢治の授業に対する生徒の反応は、校長や他の教員にもすぐ伝わり、何らかの注意か、アドヴァイスがなされたものか、間もなく、このテンポの速さは、かなり抑制されるようになったという。

この頃の賢治の心境を端的に表すものとして、保阪嘉内<sup>(21)</sup>に宛てた手紙に「授業がまづいので生徒にいやがられて居ります。」<sup>(22)</sup>という文面がある。

当初の不慣れから来る生徒の理解力を越えた授業のテンポは修正され、やがて賢治の授業は、内容豊富で、興味や関心を喚起し、理解を促進する特色ある授業という評価を得るようになっていく。

不慣れな時期では、生徒の間から、その授業内容がよく理解できないとの不満の声があった賢治も、生来の誠実さと工夫で、むしろ授業内容の理解しやすい教師という評価を得るようになる。

彼が稗貫農学校に勤務し始めて約1年半が経過した大正十二年四月一日（日）、同校は、岩手県告示により、岩手県立花巻農学校と名称が改まる。<sup>(23)</sup>

修業年限が2年であること、教員スタッフは前校と同一であることなど、名称は変わっても変化のない点も多かったが、最も大きな変化は、規模が拡張されたことである。

校舎敷地は、1068坪が3000坪になり、校舎面積は、98坪余り平屋建てが階上165坪、階下165坪の二階建となった。

また、農場の中で、桑畑は、1380坪が2000坪に、水田は、約300坪が2000坪になるなど、全般的に拡張されている。

この他に、実習地6000坪が設置されており、農業学校としての体裁が、ようやく整った印象を与える。

四月五日（木）には入学式が新校舎で举行された。新入学生は定員40名を越える47名で

あった。

四月六日（金）より新学期は開始されたが、それは形式上のことに過ぎず、実際は、まだ整備が完了していない校舎周辺の整地作業に当たったので、教師も生徒もその作業に時間を費やす日が暫く続くことになる。

五月二十五日（金）には、開校式が挙行され、以後、この日は創立記念日となる。この日に列席した生徒は86名で、これが新生花巻農学校の生徒全員であった。

この日、賢治は、開校記念行事として、自作の「異稿 植物医師」<sup>(24)</sup>、「饑餓陣営」<sup>(25)</sup>の演劇を昼夜2回にわたり上演した。

このようにして始まった花巻農学校における賢治の担当科目は、英語、化学、代数、作物、土壌、肥料、気象と他に実習指導があった。

次に、賢治が担当した教科のそれぞれについて、授業内容や指導法を当時の生徒が回想する内容から整理すると次のようになる。<sup>(26)</sup>

「作物」の授業について。授業の大部分は、稲だけを扱った。教科書に重点を置かず、その理由として、教科書の内容は東京中心であり、当地方に当てはまらないことをあげた。頭で覚えず、体で覚えることを強調し、稲作に関連する「肥料」、「土壌」、「化学」、「数学」にも内容を展開させていった。

「土壌」、「肥料」の授業について。「土壌」の授業では、教室を離れ、地域に出て、地質、土性調査を行なった。もともと賢治は、地質、土性調査の専門家といつてよく、盛岡高等農林在学中に度々、地質や土性の調査をしている。すなわち、大正五年七月には盛岡付近の地質調査を、大正六年八、九月にかけては、江刺郡地質調査を、大正七年の四月から九月までは、稗貫郡の土性調査を行なっているのである。

賢治の指導で、生徒達は、稗貫、和賀地方の地質、土性の実態を知ることになった。

「肥料」の授業は、「土壌」の授業を基にし、それに連関させて行なわれた。「肥料」は「土質」に合わせて施すべきものであることを实际的に指導した。賢治の「肥料」観で特色があるのは、窒素肥料万能の当時に加里肥料の重要性を説いたことや、稲妻の肥料的効用として、放電現象による空中窒素の固定という作用があると解説したこと、さらに、砂糖を西瓜の肥料に使い硝酸バクテリアの繁殖を促し、窒素肥料に代えるなどの実験をしたことに見られるように、深い学識から、予想外の展開を体験させる指導を行なったということである。

「気象」の授業について。気象は、農業と密接な関係を持ち、農業環境として重大な意味を持つという観点に立ち、盛岡測候所、水沢緯度観測所を訪ね、資料を収集した上で授業を展開していった。

「化学」の授業について。図表を用いて教えるのが得意で、元素の周期表、化学式（分子式、組成式、構造式、示性式）、化学反応式等、いずれも図表を用いて理解しやすい授業を工夫した。

「数学」の授業について。数学の内容は、農学校では、算術、代数、幾何に分かれており、その中で、代数を担当した。賢治は、代数の授業でも実用の観点に立ち、公式に関する授業でも教科書の配列や時間配当などは無視して、代数そのものについての理解を深めさせる授業展開をはかったから、応用問題などを扱うことが多かった。

「英語」の授業について。「英語」は、賢治の得意科目であった。盛岡高等農林学校の学生時代から彼は英語を得意とし、関豊太郎教授（土壌学）の試験に英文で答案を書いたと

伝えられている程である。英会話も得意とした。彼の英語好きはかなり徹底したもので、上京のたびに丸善に寄り、専門書に限らず、古典から現代イギリス文学のベストセラーまで購入したという。

授業は、ヒヤリングと話し方に重点を置き、教科書の読みや解釈にはあまり時間をかけなかった。英会話にも力を入れ、ビクターで初めて売り出した英会話のレコードを購入し、発音の学習指導に利用した<sup>(27)</sup>。また、教材に英詩を用いることもあり、例えば、ラビンドナート・タゴール (Rabindranath Tagore, 1861-1941。)の英詩‘When and Why’<sup>(28)</sup>を朗読させられた生徒は、印象深くそのことを伝えている。

「基本」と「応用」に徹する授業方法を取り、「基本」は徹底的に繰り返し指導し、その上に立って「応用」の授業を展開した。その中には、当然、スベルとアクセントの指導も含まれ、アクセントは詩文の暗唱により、スベルは、スペリング競争をして、意欲を高める工夫をした。

彼の英語教育法は、当時の農業学校の水準を考えると、高度なものであったことがうかがわれる。

以上の教科教育の他に実習指導も担当したので、次に実習について、やはり指導を受けた生徒の回想によって、その特色をあげると、次のようになる。

賢治は、雨天の時以外は、午後は毎日のように農場へ出た。農繁期には、終日になることもあった。農場の中では、水田が主で、他に、桑園、野菜畑にも出かけた。校舎の近辺の花壇も実習の場になった。実習は生徒を率先する形で行なったので、土を掘り起こすのも、厩肥をまぶすのも、下肥を手にするのも彼の方が生徒よりも先にするのが常であったという<sup>(29)</sup>。

実習指導時の彼の服装は、2、3円のカーキ色の作業服につば広の麦わら帽子、ゴム長靴であった。屋外で実習の出来ない雨天の時は、標本室が教場になった。<sup>(30)</sup>

このように見てくると、彼の学校での一日は、常に生徒と共にあり、しかも、それは、極めて密度の高い教育的時間であったことがわかる。

### 三

賢治の教育活動の領域の一つに創作活動をあげなければならない。創作活動の中でも、詩、童話、劇の創作は、彼の教師としての教育活動の中に生かされ、創作活動が教育活動そのものになっていることも、しばしば見受けられる。

したがって、彼が教師として活動した期間における創作活動の主なものを取りあげ、それが彼の教育活動にどのような形で生かされていたのかを確認する必要がある。

I,『精神歌』<sup>(31)</sup>大正十一年二月、賢治は、生徒の意識を高め、精神の一体化を進めたいとの意図で、農学校の生徒のために作詩した。

これが完成した時、校長の畠山栄一郎は感動し、式歌、校歌に定めてはどうかと賢治に申し出た程であったという。

賢治が固辞したため、それは式歌にも校歌にもならなかった。しかし、教職員や、生徒に愛唱されるところとなった。歌詞の一部(1番)を次に記す。

「日ハ君臨シ／輝キハ／白金ノ雨／ソソギタリ／我等ハ黒キ／土ニフシ／マコトノ草ノ／種マケリ」

II,『饑餓陣営』 農学校で、生徒を指導し上演した劇の台本、つまり戯曲である。初題は、『コミックオペレット 生産体操』であった。『バナナン大将』は、通称である。

この劇は、疲労と空腹の極にあるバナナン軍団の大將が満腹のゲップをしながら帰って来る。これに反発する特務曹長と曹長は、菓子製の勲章を沢山つけた大將をおだてて勲章を奪い兵士に食べさせ、自らは責任をとって自殺をはかる。大將はこれを止め、発明した生産体操を教え、そこから生まれた果実を収穫しつつ讃歌を歌うという筋立てである。

生産体操は農業実習を象徴するものとすれば、農学校の生徒達へ労働の重要性を訴えかける意図を持つ劇として意義づけられる。

III,『貝の火』<sup>(32)</sup>この童話は、大正七年の夏に創設されている。それを大正十一年十一月、教室で生徒達に朗読して聞かせたものである。

兎の子ホモイは溺れかけたひばりの子を救い、鳥の王から貝の火をもらう。ところが慢心したホモイは罪意識を重ねる。貝の火は、小鳥たちをいじめると曇る。その後、ホモイは父と共に野に出て狐と闘い、鳥たちを解放するが、結局、貝の火は、ただの白い石となってしまう。しかも、目の前でその石は砕け、ホモイは失明する。すると石は再び貝の火となり、どこかへ飛んでゆく。

この童話の意図は、勧善懲悪にあると解するのは簡単であるが、そのみに限定できないところがある。

人間の意識や意図を超越する崇高なるものを貝の火で象徴し、その絶対的なものへの憧憬とか帰依を訴えるものとも考えられる。

詩を代表するものとして、『精神歌』をあげ、戯曲を代表するものとして、『饑餓陣営』を、そして童話を代表するものとして、『貝の火』を紹介したが、それは、あくまでも教育活動の一環として意図的に教育活動に導入された作品の中でのことである。全作品の中からジャンル別に代表作品を選定するならば、別の作品が選ばれる可能性は、当然、ある。

賢治は、この事がある前の大正十四年四月に、杉山芳松宛の手紙の中で、「わたくしもいつまでも中ぶらりんの教師など生温いことをしてゐるわけに行きませんから、多分は来春はやめてもう本統の百姓になります」<sup>(35)</sup>と心境を打ち開けているので、いずれ学校教師を辞し、農業技術指導者になりたいとの意向を抱懷していたことは確認される。しかし、翌年三月三十一日付で依願退職<sup>(36)</sup>した背景には、先に述べた畠山栄一郎という、彼の最大の理解者であり、支持者であった人物が彼の職場に存在しなくなったということがあることも否定できない。

以上に見て来たところでも明らかなように、教師としての宮澤賢治は、いわば偶然の経緯で就任した花巻農学校において、その全精力と全資質を傾注して教育活動に精励したのであった。

もともと彼の精神構造は複雑な要素によって構成されているため、その発現形態も単純ではない。しかし、複雑な精神構造の根幹をなすものに、大正三年に読んだ島地大等編『漢和対照妙法蓮華經』から受けた宗教的感動と少年時代（明治三十九年）より始めていた植物採集、昆虫採集、鉱物採集趣味に支えられた科学への傾斜。さらに、明治四十四年頃より見られる哲学（とくに、エマーソン<sup>(33)</sup>）、文学（とくに、石川啄木歌集『一握の砂』、明治43年刊行。）愛好。この三点によって象徴されるのは、賢治の精神構造の根幹に、宗教的情操、科学的情操、文学的情操とでも呼称すべき情操が存在していたということである。

そのような理解の上に立つと、教師としての賢治が、一見して奇行ともいえるような行

動を、その教育活動の場面において見せていることは、不思議ではなくなる。

ところが、彼の勤務したのは、花巻農学校という公立学校であった。私立学校ならとも角、公立学校の教師としては、賢治の奇行は、一種の逸脱行為として見られる側面を持つ。

彼には、就任の時点から最大の理解者であり、支持者であった畠山栄一郎を管理者である校長に持つという幸運があり、その幸運に恵まれている期間においては、その逸脱行為も、教育的熱情の表現形式として許されたのであった。

しかし、その畠山栄一郎が、大正十四年十一月に福島県立東白河農蚕学校長に転出し、後任に、中野新左久<sup>(34)</sup>が就き、前任者とは対照的な学校運営を始めるに及び、賢治の立場やそれに併なう心境は決定的変化を見せることになる。

## 結語

宮澤賢治は、その詩と童話においてよく知られる存在である。しかし、教師としての彼の活動内容を調べてみると、詩や童話を創るという文学的営為と、学校で教師を勤めるといふ教育的営為が、彼においては不即不離の動的関係にあったことが諒解される。

彼においては、教育も一種の創作活動であったのである。ただ、通常の創作活動は、素材を用いて、表現活動としての創作を行うのに対して、彼は、生徒を素材として扱い、それを用いて人間形成という名の創作を行うと考えたわけではない。

教育は、確かに、創作活動であったが、教師と生徒の関係は、製作者と素材の関係ではなく、あくまでも人間対人間であると、彼は考えた。すなわち、人間としては、教師も生徒も対等であると考えたのである。したがって、創作活動は共同作業となる。

このような思維方法は、青年時代に接した佛教、とりわけ「法華経」の教理から来ているものと思われる。

彼においては、すべての活動は「利他的行為」として把握されていたので、文学創作の活動も教育活動も「利他的行為」に他ならず、その限りにおいて、活動は、自他共通に働く救済の活動でもあった。

教師としての彼の活動が、奉仕的姿を見せているのも、彼にとって、教育に恵念することが、自と他を救済する活動であると考えられていたことの証左になるのであろう。

教師としての彼について調べる時、彼に接触した者の大多数が、彼の献身性を強調するのも、首肯されることである。

それにしても、以上のように理解するだけでは、なお、不明確な部分が残るのも事実であり、宮澤賢治を教師として見るばあいでも、なお、他の側面からの考察が必要であることを痛感させられる。

## 注

- (1) 佐藤成、証言宮澤賢治先生、農山漁村文化協会、1992年、261頁。
- (2) 畠山栄一郎は、宮澤賢治の学んだ盛岡高等農林学校の先輩（明治四十四年卒）で、農蚕講習所所長、稗貫農学校長、花巻農学校長を歴任。
- (3) 稗貫農学校の前身が農蚕講習所であったことから、「蚕」と「桑」の関連で呼ばれた愛称。
- (4) 佐藤成、前掲書、144頁。
- (5) 同前書、144頁。



- (6) 堀尾青史, 年譜宮澤賢治伝, 中央公論社, 1991年, 129頁。腐植質の栄養価値を無機説の立場から, 岩手の火山灰土という土壌の中で研究した。
- (7) 斎藤昭俊, 成瀬良徳編著, 日本仏教人名辞典, 新人物往来社, 1993年, 190頁によると, 天台学の第一人者で, 『天台教学史』, 『真宗大綱』, 『真宗聖典』等の著者。
- (8) 佐藤泰正編, 宮澤賢治必携(別冊国文学No.6), 学燈社, 1980年, 209頁。ロシア文学の中でも, とくにツルゲーネフ(Lvan Sergeevich Turgenev. 1818-83。)のものを好んだ。
- (9) 宮澤賢治, 蜘蛛となめくちと狸, 校本宮澤賢治全集第七卷所収, 筑摩書房, 昭和六十年, 5~18頁。
- (10) 宮澤賢治, 双子の星, 同前全集第七卷, 19~37頁。
- (11) 宮澤賢治, 猫, 校本宮澤賢治全集第十一卷所収, 筑摩書房, 昭和六十年, 259頁。
- (12) 宮澤賢治, ラジュウムの雁, 同前全集第十一卷所収, 260~261頁。
- (13) 佐藤成, 前掲書, 135~136頁。
- (14) 宮澤賢治, 手紙, 新校本宮澤賢治全集第十二卷所収, 筑摩書房, 1995年, 313~314頁。
- (15) 宮澤賢治, 龍のはなし, 同前全集第十二卷所収, 313~314頁の『手紙一』と同一の内容か?。
- (16) 盛岡高等農林学校農学科第二部部長で土壌学の権威。関豊太郎のエピソードは, 堀尾青史の前掲書, 124~126頁に紹介されている。
- (17) 宮澤賢治, 前掲全集第九卷所収, 145~150頁。
- (18) 佐藤成, 前掲書, 139頁。
- (19) 同前書, 147頁。
- (20) 同前書, 145頁。
- (21) 保阪嘉内は, 明治二十九年生まれで, 賢治と同年であるが, 盛岡高等農林学校では1級下となった。寄宿舎も同室で親交があったが, 事情があり退校した。堀尾青史, 前掲書, 143~144頁に詳しい。
- (22) 大正十年十二月, 保阪嘉内宛の書簡は, 日付不明。校本宮澤賢治全集第十三卷所収, 筑摩書房, 昭和六十年, 219頁。
- (23) 佐藤成, 前掲書, 179頁。
- (24) 宮澤賢治, 植物医師, 校本宮澤賢治全集第十一卷所収, 筑摩書房, 昭和六十年, 350~362頁。
- (25) 宮澤賢治, 饑餓陣営, 同前全集第十一卷所収, 325~340頁。
- (26) 賢治の授業に関する教え子達の回想は, 畑山博, 教師宮澤賢治のしごと, 小学館, 1991年, 26~38頁, 47~79頁, 佐藤成, 前掲書, 79~98頁に紹介されている。
- (27) 佐藤成, 前掲書, 94頁。
- (28) 同前書, 96頁。
- (29) 同前書, 31頁。
- (30) 同前書, 31頁。
- (31) 『精神歌』の成立経緯については, 佐藤成, 前掲書, 283~290頁に詳しい。
- (32) 宮澤賢治, 貝の火, 校本宮澤賢治全集第七卷所収, 筑摩書房, 昭和六十年, 38~60頁。
- (33) Ralph Waldo Emerson (1803~82) については, 斎藤光著, エマソン, 研究社, 昭和49年に詳しく紹介されている。斎藤によれば, エマソンは神秘家であり道德家であった。
- (34) 中野新左久は, 盛岡高等農林学校, 第三回卒業生で, 前任の畠山栄一郎の3年先輩である。性格的には几帳面で, 畠山と対照的であったといわれる。佐藤成, 前掲書, 246~247頁。
- (35) 大正十四年四月十三日付の卒業生杉山芳松宛書簡。校本宮澤賢治全集第十三卷所収, 筑摩書房, 昭和六十年, 224頁。
- (36) 大正十五年三月三十一日(水), 依願退職する。辞令の文面は「岩手県立花巻農学校教諭兼舎監/宮澤賢治/願ニ依リ本職並兼職ヲ免ス/十五年三月三十一日/岩手県」とある。校本宮澤賢治全集第十四卷所収, 筑摩書房, 昭和六十年, 604頁。